東京フィルハーモニー交響楽団とのお付き合い

第26代学校法人学習院院長 学習院名誉院長
内藤 政武

東京フィルゆかりの方々に、クラシック音楽に魅了されたきっかけや音楽生活について綴っていただく本連載。第29回は、パートナー会員として東京フィルをご支援くださっている内藤政武様。ご両親の影響で幼少期よりクラシック音楽に親しみ、東京オペラシティビルとコンサートホールの建設をきっかけに40年余にわたり東京フィルを応援くださっています。

東京フィルハーモニー交響楽団を身近に感じ、ファンとなったのは、私が東京オペラシティビルとコンサートホール建設の担当者になったときからですので、今から40年前くらい前からでしょうか。

私は両親がクラシック音楽を趣味としていましたので、小さい時から音楽を聴く機会に恵まれていました。父はベートーヴェンの交響曲の第1番から第9番までのスコアとレコードを持っていて、家にいるときはしょっちゅう聴いていました。母は学生時代から声楽を習っていて、合唱団に入って歌っていました。私は学生時代から、母の演奏会には欠かさず聴きにいきました。指導の先生は前田幸市郎氏で、ブラームスのドイツ・レクイエムとかフォーレのレクイエムなどの宗教音楽でした。

私のクラシック音楽の趣味に火が付いたのは、中学2年の時、学校の授業の一環で音楽会に行ったときでした。曲目はセザール・フランクの交響曲ニ短調でした。感激して何日も何日もメロディーを口ずさんでいました。それからラジオのクラシック番組を片っ端から聴きました。まだテレビのない時代で、NHKラジオの第二放送はほとんどクラシック専門放送でした。毎日10曲以上聴いていましたから、大方の曲はおぼえてしまいました。ドヴォルザークの交響曲第9番『新世界』をドヴォルシャックの交響曲第5番と言っていた時代です。

2024年夏の軽井沢で、音楽と読書にいそしんでの避暑風景

話は現在に戻りますが、東京オペラシティ コンサートホールの所在地は、元小田急百貨店の物流センターでした。当時私は小田急百貨店の財産管理の担当もしていましたのでこの問題に関わることとなりました。文部科学省の新国立劇場建設に伴い、予定地の隣に物流センターのある小田急に協力要請の話がありました。いろいろ紆余曲折がありましたが、当社を含む数社が新国立劇場の隣接地にオフィスビルと文化ゾーン建設について合意をして、高層オフィスビルとコンサートホール等の建設に取り掛かりました。この高層オフィスビルのテナントとして東京フィルの事務所が入居することが決まり、また恒常的に練習所として使用することとなり、親しいお付き合いのご縁が出来たのでした。

レベルの高いホールを造る、これが原則でした。文化施設懇談会を設立していろいろ議論をしました。武満徹氏を座長にして検討を進めたのです。私も委員として参加しました。平成2（1990）年から5年ほど議論しましたが、残念なことに武満氏はホールオープンを見ずに、平成8（1996）年2月20日に逝去されました。まことに残念でなりませんが、東京オペラシティ コンサートホールは武満イズムの下で今も息づいていると思っています。レベルの高いホールを目指すには、世界の名だたるホールを知る必要があるとの考えで、我々担当者でヨーロッパの主要なコンサートホールを視察しました。ロンドンを皮切りに、アムステルダム、パリ、ウィーン、ミラノ、チューリッヒ、ベルリンでコンサートを聴き、楽屋を視察しました。貴重な経験でした。

平成9（1997）年9月10日にオープンしてから約30年がたち、東京フィルのコンサートを聴いていますが、木造のホールとして特別認可によって完成したので、音はどんどん趣を増してよくなっていると思います。東京フィルの音とともに益々ホールの評価が上がることを期待して止みません。

内藤政武（ないとう・まさたけ）／昭和13（1938）年東京生まれ。学習院大学政経学部経済学科卒業。幼稚舎から大学まで学習院に学ぶ。（株）小田急百貨店常務取締役、東京オペラシティアーツ（株）取締役、学習院院長を歴任。現在学習院名誉院長。